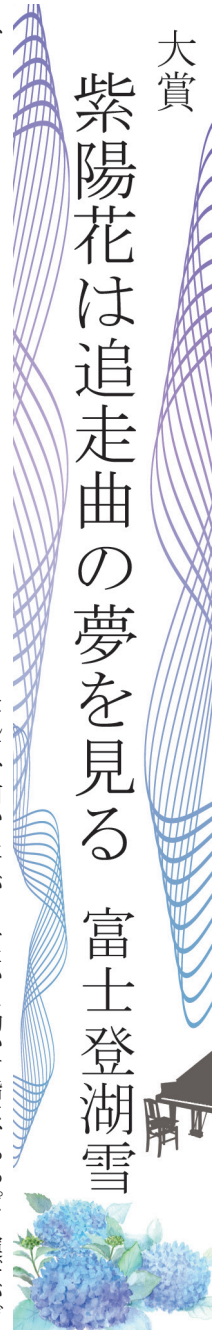


大賞

紫陽花は追走曲の夢を見る 富士登湖雪



1、
鍵盤がいつもより重い。
そのせいなのか、準備運動のつもりでの練習曲で、何度もつつかえてしまった。
なんて、何かにすがりたいに動かす指は、やつぱり運びがぎこちない。

あーくそつ、と手のひらを鍵盤の上に投げ出すと同時に、豪快な不協和音。空っぽの家にはぼんやり漂う残滓が、余計に物悲しさを募らせる。
指が黒鍵につつかかって、いつもなら届くところに指が届かなくて、おれはどうとう嫌になって弾くのをやめた。ピアノを弾くためにわざわざ早く帰ってきたのに、なんだこれ。馬鹿みたいじゃん。

鍵盤に赤い布をかけて、蓋を閉じる。黒々としたピアノの表面が鈍く光を反射して、おれの影をゆがんで映す。

部屋の中は静かだった。テーブル、観葉植物、カレンダー、花瓶。代り映えのしない景色に一つだけ、真新しい写真立てがある。白いタキシードを着た兄と、綺麗なウエディングドレス姿の花嫁さんの写真だ。家族で伊豆に行ったときの写真の横に、ひっそりと立てかけられている割に、けっこう目立つ。
「……いい笑顔」

そう呟いて、わざとらしく笑みを浮かべてみる。今頃兄は、自分のお嫁さんと仲良くやっているのだろうか。

この間の結婚式は、小さいながらもわりと盛況だった。親族も友人も特に親しい人だけ、会社の人も必要以上は招待しない、という方針しかかったが、それでも集まった人数はかなり多く

父は北海道に単身赴任。母は看護師だから帰りが遅い。大学生になっても社会人になっても家にいた兄は、この間、結婚して家を出た。家にはおれひとりだけだ。

もつとも、家にひとりきりでいることはそんなに珍しいことじゃなかった……はずだ。小さいころからそうだった。兄が高校生、大学生、社会人……と歳を重ねて行くにつれ、その機会はずっと増えた。そうして、兄はどうとう、この家を出てしまったのだ。

寂しくないと言えれば嘘になる。けど、いい加減こんなことを寂しがっていい歳じゃない自覚も、ある。

色々な気持ちを紛らわすために、おれはもう一度鍵盤へ指を置いた。一番得意な曲から弾き始めたら案外ノるんじゃないか

思えた。

兄は常にたくさんの人に囲まれていた。相手の親族への挨拶に行かされたり、兄の友達に絡まれたりで、兄と直接話す機会はほとんどなかったけれど、どちらにしろ彼とは話せなかっただろうと思う。兄もおれ以上に大忙しだった。もつとも、その表情は幸せに緩み切っていたのだけれど。

結婚式は洋風のホテルで行われた。その日は着なれない堅苦しい服装だったからか、「お前、弘ひろよりも緊張しているんじゃないか？」なんて父に笑われた。そんなことねえよ。そう返した自分の声も、タイミング悪く入ってきた主役の兄夫婦のことも、はつきり覚えてる。着飾った花嫁さんは、挨拶で見かけた時よりもずっと綺麗だった。兄にはお似合いの素敵なお人だ。兄とは仕事を通して知り合ったらしい。

歳が十個も離れているからなのか、兄は小さなころからよくおれに世話を焼いてくれた。思えば、おれも兄の背中ばかり追いかけてきた。音楽を始めたのも兄の影響だった。

子どもにとつて家庭が全てであるように、おれにとつての兄は世界の全てだった。

何をやっても兄には勝てなかった。「自分と同時期の兄」には勝てたかもしれないけれど、「兄」に勝つことは決してできなかった。十歳も離れてるんだから当たり前だ、なんて笑われるのもわかってる。けど、おれがいくら近づいて行っても、兄はおれから遠のいていってしまう。今回もそうだ。

兄が法的に誰かのものになってしまうということが、おれは

たまらなく悔しくて、——そして、怖かった。今度こそ、一生相手にされなくなるんじゃないか。金輪際勝てないと告げられたようなものじゃないか。……そんな、気がして。

外に目を向けると、庭に咲いた紫陽花と目が合った。淡い紫色の密集した花が、今はあがった雨に濡れてきらきらと光っている。

あの紫陽花は、いつからこの家にあつたのだろう。物ごころついたときからあるあの花は、ずっとおれたち家族のことを眺めていたのだろうか。

慣れない手つきで手入れをしていた父と、花が咲いては写真を撮っていた母と、カタツムリを見つけてはしゃいでいた幼いおれと。兄はたぶん、そんなおれたちを、にっこり笑いながら見ていた。

兄は——菅原弘は、昔から、菩薩のような人だった。

天罰を与える相手を神様が選ぶならば、きっと彼だけは除外されるだろう。そんな錯覚さえ感じさせるような人だった。

だから今でも、どうしてあの人にこんな惨劇が起きたのか、まったくわからずにいるのだ、おれは。

外を見る。なんとなく頭が痛いのは、きつと低気圧のせいだ。窓ガラスに鈍く映る自分の影と、その向こうに見える紫陽花と。その視界の中に、あの日の記憶が暴力的に割り込んでくる。

——(まひろ、今日ここで話したこと、母さんたちには内緒な)

おれを抱えたまま、悪戯っぽく笑った兄の顔。その瞳の奥にある光は、いつもよりもずっとくすんで見えた。

——（お前はちびっこいからわかんないかもな）
わかんないよ、今でも。

当時の兄により近づいた今のおれでも、あの時の言葉にどう返していいのかは、わかんないんだよ。

嫌な熱がぶり返してくるのを感じる。

忘れもしない。八年前の、あの日。

おれたちほとんどでもない悪夢を見たのだ。

2、

ずっと昔の話。兄の卒業旅行と称して、家族みんなで伊豆に行ったことがある。おれが小学校二年のときだった。

伊豆に着いてすぐ写真を撮った。そのときのものは、今でも結婚写真の脇に飾ってあるはずだ。兄は当時十八歳。まだ顔立ちがあどけないけれど、今のおれよりも二歳も上で、おれなんかよりもずっと大人びているように見える。

父も母も長い休みを取って、家族みんなで、車で色々なところを見て回った。季節じゃなかったから確か海には入らなかったが、車窓から見た海岸はすごく綺麗だった。

温泉に入って、美味しいものをたくさん食べて、綺麗なものもたくさん見て。それから、やることやって暇だけど宿に帰るにはまだ早い、そんな時間。兄はほんの気まぐれで、おれを連れ出して散歩に出た。父と母は心配そうな様子だったけれど、「まひろもいるんだから、気をつけなさいよ」と散々言ってから、しつこく食い下がっていた兄にしぶしぶ了承を下していた。

「なんで外いくの？」

つないだ手をぶらぶら揺らしながら尋ねると、兄はためらいがちに息をついて、遠くの方に目をやった。

「んーとね。ひとりになったから、かな」

「おれも一緒なのに？」

「……本当にひとりつきりだと、ちょっと、寂しくてさ」

旅の疲れが出てきたのか、顔に浮かぶ笑みは普段よりずっと憂いつぼかった。おれは釈然としない気持ちを抱えたまま、目的さえ告げない兄に、黙って歩を並べていた。

だんだん日が傾いてきたせいで、風が冷たかった。

旅館を出てすぐは人が少なかったけれど、少し表に出てしまると、歩道はかなり混みあっていた。屋台の立ち並ぶ通りを歩いていたら、立ち込めるいい匂いにちよつとお腹が減ってくる。だが、夕飯の時間にはまだ早い。

そんなおれの心情を見抜いているみたいに、通りのあちこちに目をやりながら、兄がおれに呼びかけた。

「そうだなあ、兄ちゃんが無理やり連れ出してきちゃったから、帰りにお菓子買ってあげようか」

人ごみに紛れる兄の声。「いいの？」と顔を上げようとしたら、誰かとぶつかりそうになったのか、「ほら、危ない」と兄がおれの腕を引く。

それから会話もなしにしばらく歩いて、人気のない海岸線に出た。「ほら、まひろ、見てごらん」と兄の声。指さす先を見てみれば、古い造りの大きな建物が目に入る。暮れかけの日に

大賞『紫陽花は追走曲の夢を見る』

照らされて、多少の古さもその荘厳さを掻き立てているようだった。

「あれ、俺たちが泊ってる旅館だよ」

「ほんと？ すげー」

意味もわからずに感嘆するおれを、兄は微笑まじげに見て、頭をいくつかぼんぼんと叩いた。「本当にちびっこいなー、お前」と、お決まりの台詞をおれにこぼして。

「チビじゃないし」

クラスでは前から四番目だったけど、チビって言われるほどじゃないはずだ……なんて。つまらない意地からそう言うけど、はいはい、と兄はもう一度おれの頭を撫でた。

「そつやると縮むってば」

旅館の方を眺めたまま言うおれに、はいはい、ごめんな、と兄の声が続く。適当にとりなされるのもなんだか癪で、そのまま無視してそつぼを向いていると、脇の下から兄に抱きかかえられた。

「わーっ！？」

「こらこら、暴れんな……よいしょ」

腕の中でじたばたしているうちに、気付くと兄の膝の上に乗せられていた。兄は防波堤のコンクリートに腰掛けていて、その上におれが座っている形だ。

背後で波の音がした。いくばくか緊張しているおれの上で、兄がゆっくりと息を吸った。

まひろ。どこか陰りを孕んだ声音で、兄がおれに呼びかける。

「……なあに」

おれがそう返事をして、兄はしばらく何も答えなかった。ざぶん、ざぶん、と背後に散る飛沫の音が数度響いてから、兄は腕を前に回しておれの手を握った。

「お前さ、ピアノ、やってみたい？」

うん。急な兄の言葉に驚きもせず、そう答えて足をぶらぶらと揺らす。

兄は小さいころからピアノをやっていた。その姿を見ていたから、おれは何度も「ピアノをやりたい」と母にごねたことがある。

母は何を言っても聞き入れてはくれなかった。そればかりから、勝手にピアノに触ることすら嫌がった。なぜそんなに頑なに反対するのかはわからないけれど、駄目だと言われれば言われるほど興味がわくいうものだ。だから、おれは迷わず頷いた。「うん。ピアノ、やりたい」

ピアノは幼少期からの憧れだった。鍵盤で曲を奏でる兄の格好良さも、ずっと間近で見えてきていた。わくわくする反面、おれは怪訝に思っでもいた。どうして今こんなことを言い出すだろう？

「でも、なんで？」

抱きかかえられた状態のまま上を向く。兄はおれに視線を合わせようとはせず、過ぎゆく車を一台目で追ってから、口を開いた。

「……兄ちゃんさ。昔は、ピアニストになるのが夢だったんだ。

だから俺、死ぬほど頑張ったんだけど、結局俺にはそんな才能がなかった。俺みたいな奴がそこまでたどり着くには、もっともっと辛い思いをして練習しなきゃいけないのに、ここ一年受験勉強で必死でさ。ろくにピアノ触る時間もなかった。別に、ピアノを嫌いになったわけじゃなかったんだけど。……わかる？」

「んー……」

わかる、とはすぐに返事ができなかった。受験勉強がどういうものなのかわからなかったし、兄のピアノの腕は十分すこいじゃないか、と納得がいかない部分もあったからだ。

「けどさ、ずっと続けてきたことだし、ここで終わりにしたくないんだよ。だったら、演奏家として舞台には立てなくても、ピアノの先生とかも悪くないかなって思っただけ。受けた大学はそういうところじゃないけど、何かの傍らでそういうのを受け持つのもいいんじゃないかと思っただけ。だから……」

長々と言いつつ、言葉は並べて、兄はそこで言葉を切った。

空がだんだんと暗くなってきた。赤っぼさを孕んだ光が、歩道の手すりや、車や、人や、色々な物を照らしている。

夜の匂いを帯び始めた空気が、ちょうど絵の具を混ぜ合わせるみたいに、徐々に混ざってくるのがわかるようだった。

「まひろさ。兄ちゃんのレッスン、受けてみないか？」

風が木の梢を揺らす。まだ固い桜の蕾が、震えるように動く。ざぶん、とひとつ波の音を聞いた後、おれは「いいよ」と返

した。兄はひどくほっとしたような、けれども少し心配そうな、そんな感じの溜息をついた。

ちよつと肌寒い。吹き抜ける風に兄の手を引き寄せると、彼もそれに応えるように身を寄せてきた。

「まひろくらの歳の子で、どこでつまづくのかとか、どこがわかりにくいとか、知っておきたいんだよ。兄ちゃんに協力してくれるか？」

「だから、いいって言ってるじゃん」

内心飛び上がりそうなほど嬉しいけれど、わざとそんなつっけんどんな言い方をした。兄はそれをわかっているのかいないのか、「ありがとな」と言った後、二、三度おれの頭を軽く撫でた。まひろ、今日ここで話したこと、母さんたちには内緒な。そんな風に、おれに向かって言い聞かせながら。

今日の兄はなんだか沈んだ気分のようにだ。子ども心ながらにそれを察していたおれは、得体のしれない恐怖のようなものを感じて、「もう帰ろうよ」と彼を見上げた。

「んー、……もーちよい」

「やだ、お腹減った」

「……もーちよいだけ！」

途端、兄がおれにぎゅーっとのしかかってくる。同時に脇腹をくすぐられて、おれは悲鳴にも似た甲高い笑い声を上げながら、兄の腕の中でもがいた。

……この時、なにがなんでもまっすぐ帰っていればよかったのだ。

そうすれば、兄があんな目に遭うことなんてなかったかもしれない。

「まひろは、きつといいピアノリストになるよ」

帰り道。どこか仄暗い目をした兄は、おれと手をつないだまま、呟くような口調で言った。

「ほんと？　なんでわかんの？」

「わかるよ。長いことピアノやってるから……まひろ、時々母さんとか俺に内緒でピアノ触ってるだろ」

げつ、ばれてら。気まずさに咄嗟に目を反らすと、兄は優しげに「いいんだよ」とこぼした。「まひろには素質があるよ。俺にはない耳を持つてる」

そうかなあ。なんだか煮え切らなくて、兄の手をぶんぶん振り回しながら答える。ピアノを触っていると、少しおもちやにしているくらいのことなのだ。流行っているCMの曲とか、学校で歌った歌とか、おもしろおかしく鍵盤でなぞるだけ。そんな、中途半端で簡単な遊びくらいしかやっていないのに。

「母さん、まひろがピアノ弾くの嫌がつてるだろ」

どこか遠くに呼びかけるみたいに、兄が言った。あえて平淡に喋ろうと心掛けているような、不自然な口調だった。

「うん。……けど、なんで？」

「なんでって……たぶん、母さんもわかるんだよ。だからこそやらせたくないんだろ。……俺の勝手な憶測だけだよ」

後に聞いた話によると、どうやら母も——花嫁修業程度とはいえ——ピアノの経験者だったらしい。でも、やらせたくないってどういふことなのか、おれにはよくわからなかった。

「まあ、お前はちびっこいからわかんないかもな」

そう言つて、兄が悪戯っぽく笑う。チビじゃねえもん、とおれよりずっと大きい兄を見上げながらジャンプをしたら、「こちら、道端ではしゃぐなよ」と兄がおれを諷めた。

「おれだつて、大人になったら、二メートルとかいくもん、絶対」
「あー、そりゃ無理だな。遺伝子的に」

「ムリじゃねえもん。大人になったら、ぜつてー兄ちゃんよりおつきくなるし」

おーがなげれ、と軽く流そうとする兄の裾に、ほんとだから、見てろよ、ぜつたいだから、とすがりつく。兄はそんな俺を「はいはい」と諭しながら、「あ、そうだ、お菓子買ってやるよ」と強引に引きはがした。

見れば、個人経営の小さなお菓子屋さんがあった。お菓子屋さん、というよりは駄菓子屋さんに近いはずまいで、店も小柄なおじいさんひとりが守っているだけだった。

兄はそこで、おれにいくつかのお菓子を買った。小さいドーナツと、きれいな色の金平糖。コーラ味のガム。宿に帰るまでには食べきれないから帰りの車な、と言う兄に「えー」と口を尖らせていると、店主と思しきおじいさんは、おれと兄に一つずつ飴をくれた。

「まひろ、どっちがいい？　こっちがマスクットで、こっちが

「いちご」

兄が手のひらで飴を弄びながら、言う。「いちご」とおれが即答すると、「はいよ」と赤い包み紙を差し出して、真面目な顔をした兄がしっかりとおれの目を見つめた。

「おつきくなつたな、まひろ」

「……さっきまでチビとか言つてたくせに」

「いや、そういう意味じゃないよ」

兄が口をほころばせる。なんだかもやもやとした気持ち胸にわたかまるのを感じて、おれはムツとした顔を作つたまま、赤くて丸い塊を口の中に放りこんだ。べとべとしたいちごの味が広がる。

「……おいしい？」

「ん」

「何怒つてんの」

「べつに」

そう、本当に、別に怒つてなんかなかった。ただ、なんとなく意地を張りたくて、そんな風にいじけたふりをしていただけだったんだ。

「ふーん、じゃあ、おにーちゃんも怒つちやおつかなー」

冗談めかした口調で、兄が数歩先に進む。おれをからかいたいだけなんだろうなつて言うのはなんとなくわかつて、だからこそ、素直に謝ることができなかった。そんな言い訳、今さら許されないだろうけれど。

なーんちゃつて。兄がおれを振り向きながら、笑う。その瞬

間、兄の顔からさつと血の気が引いた。あちこちから甲高い悲鳴も聞こえた。背後で唸るような重低音。事態が読み込めない。「まひろー!」

兄が半ば叫びながら、必死の形相でおれの手を引いた。引つ張られた勢いでぼんやり立ちつくしていると、半狂乱になった兄はおれの背中を力任せに押しした。

前に大きくつんのめりながら、流石に怖くなつて、振り返る。その途端、大きなブレーキ音に加えて、物が壊れる時の派手な音。地鳴りにも似た振動に尻から転んだ。

ひとつ、人影が弧を描きながら吹っ飛んで、奥の店に突っ込むのが見えた。さっきのお菓子屋さんの所だ。

人影は柵をいくつもなぎ倒し、乗り上げ、お菓子がいくつも飛び散った。段ボールもいくつもひっくり返されて、やがて、転がりまくつた人影は、下半身だけが柵に乗り上げる格好で止まった。

あちこちぶつけて痣と傷だらけになって、手首が変な方向に曲がっている人型の塊。これが兄だと気付くのに、数秒かかった。

嘘だろ。何かにすがるように辺りを見渡す。曲がった標識の支柱。低い車止めに、乗り上げた白い軽トラックの、割れたフロントガラス。へこんだ車体。ライトの部品もあちこち割れて、タイヤもパンクして、辺りには焦げくさいような埃っぽいような匂いも漂っている。

店に飛び散つたお菓子と木の箱。呆然としている店主。悲鳴

を上げてへたり込む人、携帯で連絡を取っている人、写真を撮る人、力を失って言葉も出てこないおれ。

一度音を失った耳が元に戻り始めると、急に、辺りが音でごつた返し始めた。

「誰か、救急車——」

「ちよっと、やばくない、あれ」

「もしもし、暴走した軽トラックの事故で——……ええ、若い男の子です、運転手は——」

「坊や、大丈夫？」

「あれ、生きてる？ 生きてるよね！？」

「皆さん、落ち着いてください、皆さん——」

「君、どこの子？ おうちは？ お父さんとお母さんは？」

あまりにも多すぎる音の情報量に、頭がパンクしそうだ。

「……に、ちゃん」

ふらふらとした足取りで近付く。「おい、坊主、そっち行っちゃ駄目だ！」大人の怒鳴る声が聞こえる。

兄は額から血を流しながら、片手を抑えて蹲っていた。まだ何が起こったのかつかめなくて、ぼんやりとその様子を見下ろす。

兄がうつすらと目を開けた。「……まひろ……大、丈夫？」とぎれとぎれの掠れ声で、兄がおれを見上げる。自分はずっとも大丈夫そうじゃなくせに、呻くように言って、彼は安心してような様子で目を閉じた。

悲痛に叫んだ自分の声は、まるで、意識の外で響いているみ

たいだった。

そこから先のことはよく覚えていない。おれはいつの間にか病院の待合室にいて、母の腕の中でわんわん泣きながら、ずっと神様に祈っていた。

どうか兄ちゃんを助けて。いい子にしているから。もう聞き分けの悪ことなんて言わないから。ごめんなさい。ごめんなさい。指が痛くなるくらい両手を握り合わせて、何度も何度もうやうや祈った。

兄の怪我は幸い命に関わることはなかったが、大腿骨を折った上に左手首の腱を切るという大惨事だった。左手の腱は手術でどうにかつなぎとめたものの、握力はおろか、下手をしたら感覚さえ戻らない可能性がある。医者はそう淡々と告げた。

兄のレッスンの話は立ち消えになった。ピアノを弾けないんじゃないレッスンどころじゃないのだから当然の話だ。その代わりと言ってはなんだけど、兄が母にしつこく頼みこんだとかで、おれはしばらくしてからピアノを習い始めることになった。

二度と弾けなくなった兄の代わりに始めたピアノは、レッスンの先生も驚くほど目に見えて上達し、普通は中学生から始める上級コースを小三の段階で受けられるまでになった。部活も中高共に吹奏楽部に入って、まるで何かの罪滅ぼしみたいに、おれは楽器を奏で続けた。

兄と話す機会は、伊豆の旅行以来めっきり減った。兄が大学生になって家にいる時間が減ったのもあるし、おれが彼を避けがちになったのも一つの原因だった。

話す機会が減つても、おれは兄の背中を追いかけ続けた。彼を追い越さなきゃいけない気がした。おれのせいで人生の半分を失つたような兄のことを、せめて慰められればと思つて、必死に兄の後に追いつがって生きてきた。

追走曲みたいだ、と思つた。カノン、あるいは輪唱。要するに「かえるのうた」みたいな、初めの旋律を後追ひし続ける曲のことだ。

おれの人生は兄の追走曲なのだろうか。そう考えてしまつて、時々怖くなるけれど、おれはそれを受け入れるしかなかった。だって、本当にトラックに撥ねられる予定だったのは、左手を怪我してピアノが弾けなくなるのは、たぶん、おれの方だったはずなんだから。

3、

家のどこに腰を据えようにも落ち着かなくて、おれは結局、ピアノの前の椅子に腰かけていた。

蓋と布を取つて、鍵盤を眺める。人差し指で鍵盤の一つを押すと、ぼーん、とくぐもつた音が響く。湿気が多いからだろうか。

一度無心にならなければ、と、目を閉じて深呼吸をする。おへその位置に真ん中のドがくるように、というのは、兄がおれに教えてくれた言葉だ。

心臓の鼓動まで聞こえそうなくらい、耳に全神経を研ぎ澄ませる。手を置いて、ひとつ息を吸う。弾く曲は決まっていた。パッヘルベルの『カノン』。シンブルだからこそ、弾く人の技量が

もろにあらわれる曲だ。

音の一つずつ折り重ねていくような、淡々としたリズムで曲は始まる。鼓動にも似た単調なリズムの中に、徐々に脚色がくわえられていくイメージで。一つずつ加えられていた音はやがて二つになり、やわらかな和音になり、それから滑らかな指使いを必要とする、多彩で繊細な旋律に変わっていく。

心が弾むようでもいて、逆にひどく落ち着く調べを持っている、不思議な曲だ。メロディーがあちこち波打っている間にも、奥底に響く音にはやっぱり、安定したリズムがある。弾いている側はそんなでもないけれど、黙つて聞いているだけだと、たぶん、眠くなる。

最後の音を弾きおわつて、こーん、と静かに響く余韻へと耳をすませる。やつと心が落ち着いてきた気がする。指もいつもの調子を取り戻して、鍵盤にびつたり吸いつくみたいに動いてくれた。

ふう、と興奮混じりの息をつく。そのままおれは、背中の後ろで手を組んで、んーつと背中をのぼしていた。……その時。「まひろっ。」

急にそんな声が聞こえて、咄嗟に後ろを向いた。見ると、兄の姿があった。がらんとしたリビングの入り口で、彼はおれの方をきよとんと見ている。

「兄貴……なんで」

「なんでって、俺の部屋、まだ荷物あつたら。取りに来たんだよ」なにその顔、と兄がいたずらっぽく笑う。兄の表情はあの時

より大人びていて、一方おれはまだ彼の身長すら越せずにいる。

「今日、早かったんだな。ピアノ弾いてたの？」

「いや、うん……まあ」

「まあってなんだよ。後ろめたいことでもあんのかよ？」

目を避け続けるおれの視界に強引に食い込みながら、兄が詰問してくる。兄はこちらにぐいぐいと身体を迫らせていたが、しばらくすると飽きたようで、「じゃあ、ちょっと荷物取ってくるわ」と明らかに告げた。

「いつてら……」

語尾の端が消え入りそうになる。家から兄の荷物がなくなるとことは、兄がいた痕跡までなくなってしまうのだろうか。一瞬だけ、そんなことを考えた。

それからしばらく。部屋を出てきて早々、兄はリビングのテーブルに腰かけた。兄がいると分かっている気まずさから何を弾く気にもなれなかったおれは、ピアノの四角い椅子に腰かけたまま、足をぶらぶらさせていた。

「まひろ、いつの間にか随分と上手くなったんだなあ。驚いたよ」
兄が口火を切ったが、「ああ、うん」と煮え切らない返事しか出てこなくて、またリビングに沈黙が下りた。兄も少し気まぐずいようで、久しぶりすぎて何を話しているのかわからない様子だ。

「兄貴は今も弾けない？」

リビングの背の高い椅子に座った兄は、その言葉に「んー、どうだろうな」と首をかしげた。その兄の頭の後ろの方、窓の

外では、満開になった紫陽花がおれたちのを見ていた。

「左の握力は今でも弱いけど、何もできないってほどじゃないし。右は普通に使えるしな。しばらく練習したら、案外いけたりして」

「つかお前、まだあのこと気にしてんの？」

兄が冗談めかして、だけど不安そうな顔をして、尋ねる。

「そりゃ、気にするでしょ」

兄から目を反らして、自分の手をグーパーしながらおれは答えた。ふーん、そう、なんて返す兄の声音は随分平淡で、逆にかつちが怖くなってくる。

「でもさ、まひろみたいな才能を発掘できたんだから、俺はそれだけでも十分だったと思うよ。俺の技量だってもう伸びしろなかったし、最盛期の俺なんかよりよっぽど、今のまひろのほうが上手いもん」

「それは言いすぎだって」

照れ臭くなったおれがそう言うと、「言いすぎなんかじゃないよ」と真剣な声音で返された。

ぞくつとして顔を上げる。兄は泣きそうな顔をしながら、それでも意地を張ってにつこり笑っていた。

兄もおれと同じで意地っ張りなんだな。——違う、たぶん、おれが兄に似たんだ。

「なあ、兄貴。ひとつ、我がまま聞いてくれない」

兄を見据えながら、言う。なんだよ、とんでもないような顔を取り繕いながら、兄が答える。

さっきのおれのピアノって、どこかしら兄の心を抉るものがあつたんだろうな。そう思いつつも頼みごとをひとつ。それは、もしかしたらひどく残酷なことだったのかもしれないけれど、それでも構わなかった。最後のわがままのつもりだった。

「レッスンつけてくれよ、おれに」

兄はしばしの間呆然としていた。それから、「馬鹿言え、そんなの俺に出来るわけないだろ」と、焦つたように早口でまくしたてた。

「だって、約束。忘れたの？」

「忘れたことなんて……」

あるわけないだろ、馬鹿。

最後のこんな言葉は、兄の喉に絡まって、消え入るような声になつてしまつた。

兄は悔しそうな顔をして、とめどなく溢れてきそうな何かを抑えるために、くしゃつと前髪を手で握つた。

「お前こそ、いつまで覚えてんだよ、こんなくだらない約束……」

肩と声が震えている。年甲斐もなく涙に濁つた声色は、きつと、悔恨にまみれた色をしているのだろう。

「くだらなくなかないよ」

ダメ押しのもりで、おれは言った。「おれに音楽の道を示してくれたのは、兄貴だろ」

それから、しん、と音が途切れた。張りつめた空気の中で、静寂だけが重くのさばっている。

兄はそのまま、長いこと黙りこんでいた。おれも、彼に合わせて口をつぐんでいた。

伊豆の写真も、その横の結婚写真も、写真の中の兄はどちらも幸せそうな顔を浮かべているのに、今日の前の兄は全く反対の表情をしている。

何かに押し負けたみたいに、兄は重々しい溜息をついた。それから片手で顔を撫でて、少し息を整えてから、

「……まひろさ、感情こめすぎて、テンポ狂つてんだよ」

そう、一言。

「兄ちゃんが横で見といてやるから、もっかい弾いてみ。その代わり、ちよつとでもテンポ狂つたらひっぱたくからな」

俺はスパルタだぞ、と兄。おれは感激で出そうになる嬌声を抑えながら、「うん」とものものしく返事をした。

見てろよ、紫陽花。庭に向かつて目をやりながら、視線でそう呼びかける。

この家を守ってきたお前が聞く、最初で最後の、弘のレッスンだからな。

たぶん、生涯最後の、弘の魂のこもった演奏だからな。

見てろよ、決して忘れるんじゃないぞ、

紫陽花。